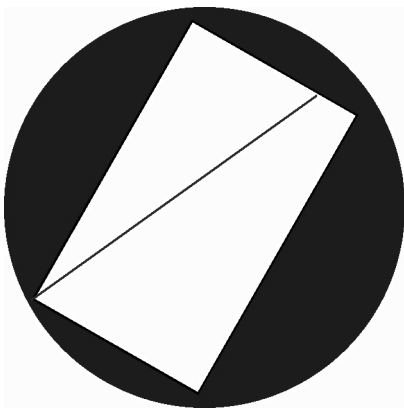


A · J REPORT

**ASIA · JAPAN
RESEARCH CENTER 2003**

13



ASIA-JAPAN RESEARCH CENTER
KOKUSHIKAN UNIVERSITY

CONTENTS

岡田 保良 ... 卷 頭 言

第10回シンポジウム 活動レポート

文 部 科 学 省 ア ジ ア 資 料
経 済 産 業 省

卷 頭 言

イ ラ ク の 文 化 遺 産 問 題

アジア・日本研究センター研究員・運営委員
国際交流センター センター長・教授
岡 田 保 良

米英軍がイラク侵攻を開始して、早や半年が経過した。独立国家再興への道筋は未だ漠とし、連日報じられる米兵の死傷事件や諸施設へのゲリラ的攻撃はむしろエスカレートしている。しかし一方では、暫定的な統治評議会が来年度予算の策定にとりかかるなど、

少しずつだが中央政府的な機能も復興しつつあるようだ。

全国土を見渡して、治安や民生が回復基調にあるのか否か、本当のところはなかなか分からないが、バグダード制圧直後に報じられた国立博物館略奪という突発的な事態を契機に、イラク

が誇る古代文明の遺産をとり巻く環境も、いち早く国際協調のもと「戦後」「復興」へのプロセスを順調に歩み始めたように見える。

ユネスコの呼びかけによって、すでに4月中に2回の専門家会議がパリとロンドンで開催されたうえ、現地調査のミッションも2度派遣されている。動産文化財の散逸に備えて国際警察機構の動きも迅速だった。日本国はというと、国士舘大学イラク古代文化研究所の面々が、人的にも情報の上でも少なからず貢献を果たしてきたところである。

* * * *

こうした動きを受け、8月初旬、イラクを含む海外から20名近い専門家が来日して円卓を囲むという3回目の会議が東京で開催された。文化庁が海外の文化財問題にこれほど張り切って正面からコミットするのは、おそらくはじめてのことである。

最終的に7項目にわたった勧告案の骨格は、おそらく共同主催者でもあるユネスコ本部で練られていたにちががなく、1日限りという会議ではあったが、近く開催が約された国際的な調整会議が実現するとなれば、最大の成果ということができるだろう。

ただ、イラク博物館略奪の事態を受けて外務省がいち早く公表していた100万ドルというユネスコ信託基金の活用について、会議中ほとんど言及される機会がなく、何の提案も要請も得られなかった。これ以上は望めぬ識者が集っていただけに残念なことであった。

* * * *

文化遺産をめぐるユネスコが主導する類似の国際協力体制は、まだ動き出したばかりのアフガニスタンにその前例がある。昨年5月末に関係国代表がカーブルに集まって開催した会議は、

それぞれが資金や拠出金を明示し、担当地域や業務分担を協議するという、まさに国際調整会議だった。日本はユネスコに督促されて信託基金の拠出を外務省が決したものの、公式の代表は送れず、会議と現地の情報は、インターナショナルな立場で出席された平山郁夫氏に頼るしかないという体であった。

主要国に一步も二歩も先んじられたアフガンでの経験が、今度のイラクでは外務省も文部科学省をも走らせたように思われる。ただアフガンではカルザイ政権がすでに発足機能しており、曲がりなりにも諸外国から文化財関係の援助を受ける体制が整っていたのに対し、イラクではすべての決裁権は未だ占領軍にあり、文化遺産に関わる国々の調整会議も、漸くこれからというところである。

* * * *

かつては、良くも悪くも海外学術調査は文部省、対外援助は外務省という割り切りがあった。いま、「海外における文化遺産の保護」という新たなタスクを突きつけられ、その回答をわが国は迫られている。文部科学省は今までになく張り切っているかに見える。しかし昨今の状況では、予算を単年度に貼り付けるような形は、米英の思惑通りに進まぬ現実と乖離する恐れ無しとしない。外務省とて信託基金を如何に活用するか、他の多様な援助スキームも十分睨みながら、急ぐ必要もなからう。

近々に関係各国が再度集い、イラクの文化遺産をめぐる資金と業務の分担を話し合う機会があるはずだ。その前には、わが国外務、文科両省間の調整が欠かせない。決して風通しのよい間柄ではないとの風聞もある。我ら国士舘の面々が果たしうる役回りも決して小さくないといえ、手前味噌にすぎらうか。(了)

第10回シンポジウム

北東アジアをめぐる新情勢とわが国の対応

本センターでは激動著しい北東アジア新情勢に的確に対応すべく当問題に特化した活動を展開しており、当問題を中心としてこの3月に開催したシンポジウムの第二弾として2003年7月15日 第10回シンポジウムを、社団法人 世界貿易センター（東京）、社団法人 先端技術産業調査会の後援のもと開催された。

あいさつ	三浦 信行	当センター長、本学 学長
問題提起	西原 春夫	当センター代表 学校法人国士館 理事長
特別講演	野村万之丞 氏	総合芸術家 本学21世紀アジア学部客員教授 「マスクロードプロジェクト アジアの文化共有」

基調講演 マスクロードプロジェクト
アジアの文化共有

野村 万之丞

総合芸術家、本学21世紀アジア学部客員教授

このごろは「野村さん、狂言もなさるのですか」と言われて少し悲しい思いをしているが、本職は伝統芸能の狂言の俳優をしている。この狂言とはなにか？ 狂言という言葉一つを取っても、たいていの人にとってなじみが薄いだらう。どんな所で耳にするか目にするかという、多分新聞が一番多いのではないか。時々新聞を見ていると、「狂言強盗」とか「狂言自殺」とか「狂言」という言葉がある。

この様にあまりいい言葉で使われていないが、狂言とはもともとは仏教用語であり、538年仏教が伝来した時に、仏教用語の中に「むやみに飾り立てる」とか「たわいないことを言う」という意味の狂言綺語（きご）として入ってきた言葉である。それがその様なことを言ったりしたりすることへの戒めのお芝居というかたちに変化した。

日本人は近年、非常に愚鈍な民族になったから難しいことを簡単に知ろうと辞書を調べる。すると辞書には「狂言とは、能と能の間に演じられるせりふ劇」と書いてある。では、能とは何だろうと思って「能」を引くと、「能とは、狂言と狂言の間に演じられる歌舞劇」となっておりよくわからなくなってしまう。少しお気付

冒頭、当センター長 三浦 信行（本学学長）、当センター代表 西原 春夫（本学校法人 理事長）よりの主催者挨拶及び問題提起がなされ、下記の陣容で、朝鮮半島情勢を睨んだ北東アジア情勢の今後とわが国の外交姿勢のあり方に焦点をあて、活発な基調講演とディスカッションが展開された。

パネルディスカッション

「朝鮮半島の将来 - 日本はどう対応するのか」

パネリスト	小此木政夫 氏	慶應義塾大学 教授
	伊豆見 元 氏	静岡県立大学 教授
	金 忠植 氏	東亜日報 東京支社長

コーディネーター	小牧 輝夫	当センター運営委員 本学21世紀アジア学部教
総司会	三浦 宏一	当副センター長 本学21世紀アジア学部教授

きの方は、能と狂言はまるでサンドイッチのように交互に上演されているということが分かるのだが、自国の伝統を知るといふこと、或いは他の国を知るといふ知識の根本は、こうした解釈、考え方にあるのだと思われる。

□ 能と狂言 誕生と経緯

大学で学生などに教えるときには、この能と狂言の関係を難しく言わないで、簡単に言うようにする。重い話題を軽く言うので、これを「重軽（おもがる）」と言っている。明治の人たちは重い話題を重く言ったので、「重重（おもおも）」である。「今日は狂言という素晴らしい笑っていい喜劇を見るので、みんな笑わずにしっかり見なさい」。こういうふうに言ってみんなが芸能から離れていってしまう。これが「重重」であった。

戦後の日本のジャーナリズムとは簡単な軽い話題を重く言う。「軽重（かるおも）」である。薪をたいて能をやっている薪能などというのは、もとは民衆の娯楽なのだが、「幽玄の炎の向こうにある家元の何とかの姿は、何とかであった」とかと言うと、いかにもありがたくなる。これを「軽重」と言うわけである。そしていまどきの若者、学生たちは、ただ酒を飲むという軽い行為を「一気、一気」とやりながら、軽い話題に興じる。これが「軽軽」である。

しかし、これからの21世紀に大事なものは、重い話題を軽く言うこと、つまり「重軽」の時代ではないか。つまりこうしたアプローチで言うならば能と狂言の関係は、「双子の兄弟である」と言えよう。双子の兄弟には、似ているところ

A J 活 動 レ ポ ー ト

と違ったところがある。兄弟であるから当然両親がおり、母親は猿楽という芸能である。こっけいな、笑っている、ものまねの芸能を猿楽と言う。

一方、父親に目を向けると、これが今日のアジアと関係が多分にあるのだが、父親がたくさんいる。例えば伎楽（ぎがく）や雅楽、田楽、白拍子、傀儡（くぐつ）や絵解きなど、さまざまな文化芸能が父親になっている。この芸能はすべて母親より年上である。つまり、先に生まれた文化芸能がすべて父親になったのである。

最初の父親は、本講演の主題であるマスクロード・プロジェクトのテーマになっている『真伎楽』の基となった「伎楽」だと言われている。これは今から1500年ほど前、聖徳太子の時代にシルクロードを通して、ギリシャ、ペルシャからインド、中国から朝鮮半島を経由して、百済の首都扶余（ぶよ）からきた味摩之（みまし）によって仏教とともに伝えられた、音楽だけを用いるパントマイムの仮面劇だと言われている。この「伎楽」は既に平安時代の初期か鎌倉時代、今から千年前に消滅してしまっており、わずかにその痕跡を伝える伎楽面などが正倉院、法隆寺あるいは東京国立博物館などに存在するのみである。

しかしアジア中どこを見渡しても1500年も前の仮面が残っているということはない。この様に日本が世界に誇れる文化として「残す」ということがクローズアップされなければならないだろう。そして、その残った「伎楽」を、誇るべき文化としてアジアへ戻していかなければならない。後述するがマスクロードプロジェクトのメインテーマもここにある。

2番目の父親にあたるのが「雅楽」という芸能である。例えば天皇家では今でも雅楽が脈々と受け継がれているように、途絶えずに千年も伝わっている芸能である。この雅楽という名称はそのまま入ってきたのではなくて、いわばいったん編集された名前である。当時海外から伝来するものは、高句麗から来れば高麗楽、渤海の国から来れば渤海楽、林邑（ベトナム）から来れば林邑楽、唐から来れば唐楽、これら全てを編集して“みやびな楽”、雅楽という名前を付けたわけである。

雅楽の中でも小さな面をかぶって、手を振りながら舞う芸能を「舞楽」と言う。「舞う」という言葉は「回る」という言葉から出たと言われるが、この手を振りながら回るといった動きがアジアの神々の共通の動きだった。振りながら回る。誰もが子供のころ「振る舞いに注意しなさい」と言われるのだが、この「振る舞う」という言葉は、「神の行う業なのできちっとしなさい」ということだったようである。それ以外にも雅楽の言葉は今でも日本の文化にたくさん入って

いる。例えば「打ち合わせ」も、打楽器をたたいて踊り手と合わせるための雅楽の言葉である。また、きれいな舞を「案摩（あま）」と言う。これは最初の舞で「一の舞」と言う。2番目は失敗するのだが、これを「二の舞いを踏む」と言う。

3番目の父親は田楽である。田楽と聞くと、「味噌田楽」や「ナス田楽」を思い浮かべるだろうが、これにも関係がある。田楽もアジアから来たものだが、野外で行われていた曲芸を田楽と言った。その中の「高足」という曲芸は、一本の高い棒に人間がしがみ付くといった出初式のような芸だが、その高い棒に人間がつかまっていた姿がナスやこんにゃくを串刺しにした姿に似ていたので、ものを刺すことを「田楽刺し」と言った。このように言葉は残っているが、本質が分からなくなっているものが多い。このことを少し知るだけでアジアのイメージが私たちの眼前に広がってくる。

●
この様な父親たちと猿楽が結婚して生まれた2人の兄弟が、能と狂言である。能と狂言を比べると能の方が有名なので兄だと思われがちなのだが、実は狂言が兄である。狂言のほうがこっけいなものまね芸、つまり母親によく似ており、弟の能は理知的で父親に似ていた。また能は悲劇が中心で「死」を題材にしたものが多いのに対して、狂言は喜劇が中心、「生きる」ことをテーマにしている。

この生きるという言葉は「あ」という音で表し、未来を意味する。一方、死ぬという音は和音の「ん」、過去を表す。両方あわせて「あ・うん」というが、神社に行くと「阿吽（あうん）狛犬」があり、これは未来と過去を通して苦しい今を祈ろうという哲学を表している。

この「あ」と「ん」に示されるように、能と狂言は生と死を表していた芸能だったので交互に演じられていたのである。従って能や狂言を好んでご覧になる方は、少しお年を召した方である。「死んだらどこに行くのだろう」とか「苦しいが明日どうやって生きていくのだろう」と思うと、能や狂言を見に行く。逆に学生などは今が楽しければいいので見に来ない。三世ではなく、一世だけを生きているので、未来と過去を考えずに今だけを考える。これは欧米的な現実論の影響が強いのだろうが、最近の若者がアジア特有の「三世を生きる」という過去と未来と現在という発想から程遠くなっていることはこんなことから見えてくる。

この能と狂言が今もわれわれの文化としてユネスコの無形遺産にも指定されながら伝わっている。そして、この芸能が傾いて、「傾く」、「かぶく」、「歌舞伎」という芸能が生まれた。この様にもともとあったルーツを探ることで私たち

の心の出どころを探っていくことが文化、芸能、芸術に与えられた使命だと考える。

□ アジアが一つだった時代

－ USA United States of Asia －

では、伎楽が来た時代と能・狂言が来た時代と江戸時代の歌舞伎が流行った時代とはどう違うのかに触れてみたい。狂言師であれば着物を着ているだろうといった思いこみ、あるいは「野村万之丞－狂言師－パンも食べますか」というように、日本人は何でも概念で結び付ける傾向がある。しかし、伎楽が渡来した時代、アジアが一つだった時代はそうではなかったようである。

例えば、スパゲティと言うとイタリア、カツと言うとドイツ、カレーと言うとインドとなるが、成田空港ではカツ・カレー・スパゲティというのを売っている。国際空港にふさわしい食べ物だと私はよく言うのだが、イタリアの上にドイツを載せて、上からインドをかけると、「ア・ラ・ジャポネーズ」と言って、日本にしかないものとなる。

この様な日本人であるので、ヴィーナーシュニッツェルと言うオーストリアの料理をトンカツ定食に移し替えることなど簡単なことであった。さらに、これに飽き足らずに西洋人がサラダと考えているライスの上にカツを載せ、それをタマネギと一緒に醤油で煮てカツ丼を作ったのである。こんなことを考え出すと、食べ物という文化にもたくさんのミックスがあることがわかるが、こんな雑食がわれわれ日本人だということ日本人が一番信じていない。

このミックスカルチャーという巨大な文化がアジアにあった時代を「USA」と言う。USAと言うと、“United States of America”と思われるだろうが、これが違う。この時代は、“United States of Asia”と呼ばれるべきであり、このアジア合衆国の中に日本州倭国が存在するのである。

聖徳太子は一度に八人の人の言うことが聞けたと言われているが、これはバイリンガルのことを差しているのではないか。そのくらい当時のアジアは多国籍であった。例えば、恵比寿様という神様がいますが、これはペルシャ人である。ペルシャ人は曲線を作り出す技術を持ってきて、それが太鼓橋や噴水などを作り出したものとなったのが、今の飛鳥にある亀石や猿石にもこの痕跡が残っている。

またミックスカルチャーのUSAの時代は「巨大」な時代でもあった。例えば奈良の大仏、心御柱、宇豆柱のあった出雲大社、北京の天安門、あるいはソウルの景福宮など枚挙にいとまがない。日本でも三内丸山遺跡の前に巨大な道がある。人口が多くななくても巨大なものが祭事

を司っており、様々な他民族をものみ込む時代だったと私は理解している。

そうした時代から日本がだんだん日本的になるきっかけとなった時代が794年ではないか。この年に京都盆地に平安京という新たな都を作り、日本は独立した。京都盆地は狭いものの、当時のアジアの諸都市と同じく風水都城都市であり、三つの山に囲まれながら、四神相応があって、龍穴（りゅうけつ）という川が流れている。この様にアジア諸都市と同じカテゴリーを持ちながらも、一方できっちりとしたものではなくて、「いいかげん」な小さな文化になったのである。

□ 日本特有の「いいかげんな文化」

「いいかげん」とは、「いい加減」という言葉である。「あなた、お風呂が沸いたわよ。いい加減よ。あなた」「分かった。あとで入る」「いいかげんね」、これが日本語だ。今の日本は、「あなた、お風呂沸いたわよ」「分かった。3分25秒分入るから。4分で上がったら、ビールを20本出しておいてくれ」。これはアングロサクソンのプロテスタントを中心にした多民族国家のアメリカが数という原理でしか国を造れなかったモーションを、こんな島国に戦後一生懸命押し込んできた結果である。この弊害がいまや子供たち、私たちの心にまで染み込んでしまっている。

こうした、いいかげんな文化が生まれた理由として、四季の存在が挙げられる。日本の文化の根本は、季節感が冬・夏という2極分化したのではなく、間に春・秋が入ることによっていいかげんになる。伎楽を調べるとよく分かるが、当時の衣装や仮面は色の鮮度と明度がはっきりしている。従って、明確な赤、黄色、緑、黒などの原色を使うとアジア人と価値観を共有できるのだが、淡い鬱金（うこん）、浅黄、古びのかかったような古代紫、日本人が美しいと思う多少色落ちした色彩は日本人独特のものである。これが、四季に裏打ちされた淡い色が入ってきた文化、「いいかげんな淡い色」をもつ文化である。

例えば酢豚という食べ物がある。日本で食べたならおいしい。さぞや本場の中国ではおいしいだろうと思って中国で食べると酸っぱいか甘いのかで、2極分化されている。寒い所・暑い所、酸っぱいか甘いである。それが日本に来ると、甘酸っぱいという言葉になる。

また、「能面のような顔」は、よく「能面のように無表情」と言われるのだが、あれは正確には「能面のように多表情」と言う。能面は下へ曇らせると悲しく見え、面を上げると楽しくなる「多表情」の顔を持っており、こうした芸能が完成した室町、中世から近世にかかっている

A J 活 動 レ ポ ー ト

く時代はいいかげんな文化の勃興期であった。

もう少し進んで歌舞伎の時代になるとシンプル・イズ・ベストを標榜するわび、さびの文化になり、日本文化は完全に世界から独立した。わびやさび、小さな茶室、くると包んだ食べ物や着物などが、世界に全く類例を見ない文化であったこともあり、明治維新以降、戦後まで日本は江戸時代の文化を輸出し、かつ外国に紹介してきた。

しかし、グローバリゼーションの時代に入り自分たちと共有できる文化がどこなのかということが問われ始めた現在にいたっても、あいかわらず日本文化として歌舞伎や能、狂言を外国に紹介しているが、これは限界があるのではないか。というのも、特にアジア諸国にこうした文化を紹介すると、「あるよ、うちにも」。仮面劇、能を持っていくと、「うちのほうがもっと楽しい」といったことを言われるともうおしまいである。

従って、日本人が日本らしいと思って売りにしてきたものはアメリカやヨーロッパ向けであったことを、20世紀の負の遺産としてよく考えなければならない。そして、アジアの時代と叫ばれながら、実際面での交流がなかなか進まない原因として、根本的にはここで示した通り日本人は自分たちの民族の出どころが分からなくなってしまっていること、このことが問題とされなければならない。

□ アジア共有の文化を求めて

そこで、私は日本の伝統について日本から離れて、アジアで共有の文化を求められないかと考えた。では、なぜ仮面を選んだのか。一言で言うと、仮面は人類が最初に創造した見えない神と見えない心をつないだものだったからである。21世紀はバーチャルの時代と言われ、見えないものが多くなったので不安が多い。同様に、心と神が見えなくて不安ばかりだったのが古代人である。そうした時に見えるものを作ろうということで変身する、神になり代わる道具として仮面をかぶったのである。この様に仮面は心と神のコミュニケーションツールの最初であった。

この仮面の次に生まれたのが、音声伝播である。これは「ヤッホー」や「ホッホー」など音のことで、今でもアフリカではトーキングドラムと言ってドラムをたたきながら会話をしている。3番目に生まれてくるのが身体表現であり、自分の強さや、自分はどこの民族であるかを踊りながら表明するものだ。4番目が言葉であり、民族によっていろいろ音が変わってきて言葉が生まれた。

そして最後の5番目に生まれたのが言葉を記憶しておくための文字である。日本は1800年前

までは文字を持たなかったもので、中国の漢族から真名という文字をもらい、仮の名の仮名を作り三つの言葉を併用してきた。その文字に加えて第6番目のコミュニケーションツールとしてデジタルという機能が生まれたことによって、現在、大混乱が起きている。こうした時だからこそ仮面に戻るべきで、原始、古代に戻ることによって様々な意味で共有項を作れると思えば仮面に着目した。

そこで日本に眠っている伎楽面を基に、アジア各国を中心として世界中を10年ほどまわり、その仮面という情報の中から、色あるいは形、漆の塗りなど民俗学や芸術文化に関わるものを調べてきた。これが私のアジアへの旅の始まりだったのである。

そして旅すればするほど、そうした仮面が残っている場所は全てシルクロードであり、かつアフガニスタン、チベット、ウイグル、北朝鮮などの紛争地帯であることがわかった。このような紛争地帯で快適でない所に行くと、「ああ、昔のアジアがあった」と、これが私の実感である。逆に紛争がなく欧米化されて快適に暮らしている所では実はアジアの文化はほとんど失われてしまっている。

□ 21世紀のシルクロード作り

マスクロードプロジェクト

そこで、これらの旅を通じて、21世紀のシルクロード作りプロジェクトをはじめようと思いついた。この21世紀のシルクロードは、かつて文化の潮流の最終地点であった日本から出発して、欧米に恩返しをしたらどうだろうというもので、残す文化を得意にしている日本が、アジア共通の仮面楽劇「伎楽」を古くて新しい創造芸術へと作り直して、アジア共有の財産、ひいては人類共有の財産とするため発信していくものだ。さらにアジア中、ひいては世界中の芸術家や文化人、あるいは政治家や経済人と共に研究、学術発表を織り交ぜながらシルクロードを逆流して新しい文化ネットワークを創造しようという壮大なプロジェクトである。これを仮面でたどるので、「マスクロードプロジェクト」と呼んでいる。具体的には2001年に『真伎楽』公演を東京からスタートさせ、奈良、太宰府を通過して海を渡り、韓国、北朝鮮、中国、いずれはインド、パキスタン、トルコ、ギリシャを経て西洋へと逆流させて、文化の恩返しをしていきたい。

そこでまず去年4月に日韓国民交流年記念事業の一環として韓国・景福宮の国立民族博物館前に大きなセットを作り、韓国各TV局、新聞各社勢ぞろいの中満員の観客の前で『真伎楽』を上演した。かつて、聖徳太子と味摩之が行なったように、アジアのアーティストたちに混ざっ

て、扶余では100人、ソウルでは120人の韓国と日本の子ども達が市民参加として加わりまさに国民交流そのものとなった。

さらに、北朝鮮まで行くために一昨年から様々な折衝を民間活動の一環として行った。私は机上の空論が嫌いである。フィールドワーカーの人類学者であるから、案ずるより産むがやすしと現地へ赴いて交渉を行い無理も言う。平山郁夫先生も高句麗壁画古墳をユネスコの世界遺産に登録して戦争を避けようとしているが、平山先生は有形文化を、私は無形文化を求めて訪朝したわけである。北朝鮮をとりまく世界情勢が緊迫化する現在、政治や経済よりも文化によって、新しい時代の突破口を開くことこそ大事だと考えている。

その訪朝体験から、彼らはアリランの中でも統一のアリランである「ポロアリラン」を基本にして、それを歌いながら、統一を悲願にしていることが印象づけられた。私も、このマスクロードが38度線を越えて、韓国のソウルから平壤へ入って行って、高句麗の遺跡や檀君陵で演じるようになればいいと願っている。そのときにはトラックにアジア中の芸術団が乗って、ポロアリランを歌いながら渡っていく。

北東アジアの連携に向けて文化立国日本ができる使命とはこんなところにあるのではないか。政治と外交もまた大事なことであるが、民間として文化的な結びつきを進めていくことこそが重要である。この文化や生活の交流ということなぜ言わないのか。これは国もそうだが、民間も声を上げて言わなければならないことだ。

古来よりの伝統をみると異国の人が新しい文明や良い薬、あるいは素晴らしい技術を持ってきてくれると、その人たちを神として崇拜するという傾向がある。ペルシャの人が恵比寿様になり、マハカーラと言うインドの神が大黒様になっていったように、七福神とは七つの海を渡ってわれわれに素晴らしい文化をもたらした。それを神として私たちは崇め奉ったことから分かるように、この伎楽もアジア中の人たちが様々なものを持ってきてくれたことへの感謝だと考えたほうがいいだろう。

そこで民間の文化交流の突破口になる先兵として、この感謝をあらわす伎楽の一つの基にして、『真伎楽』と命名をしてマスクロードプロジェクトを始めている。

『真伎楽』はパレードで始まる。人は道を歩くことによって共通の心を得ようとする。また、遠い世界から来訪者たちが幸福という宝や過去という素晴らしい知恵を背負って現われる。仮面をかけて黒白の衣装を身にまとい、太鼓やラッパを響かせパレードをしながら、国境や人種

や性別を越えていくのである。道を清める「治道」、ヒンドゥー教の神鳥ガルダである「迦楼羅」、呉の国の王「呉公」その妻「呉女」僧侶「婆羅門」ら14種24面の仮面をかぶった登場人物たちが、過去現在未来が一体となった世界をくりひろげる。

このマスクロードプロジェクトで演じる劇団をわれわれは「エトノス」と呼んでいる。エトノスとは古い哲学の言葉で、「国境を超えて文化を共有する集団」という意味がある。われわれはこのエトノスを合言葉に向こう10年、20年、シルクロードをさかのぼってアジア共有の文化を作りながら、平和を一つのキーワードにしながらかつていきたいと思っている。

9.11を見て、「イスラム文明とキリスト教のアングロサクソンの文明の衝突だな」と思ったのだが、この二つの文明には偶像崇拜拒否という共通項がある。ほかの宗教や文明には全部仮面がつきものなのに対して、このプロテスタントとイスラムは人間教であり偶像を拒否したので仮面がない。

仮面は八百万（やおよろず）の神を表す。従って、対立しているアメリカとイスラムの仮面を持たない文明の間に、仮面を持ったアジアが立ち入って多角度から役に立つことのできる時代はそう遠くないだろう。

パネルディスカッション 「朝鮮半島の将来 — 日本はどう対応するのか」

コーディネーター
小牧 輝夫

当センター運営委員・研究員、本学 21世紀アジア学部教授

最近、北東アジア問題がクローズアップされているが、その中でわが国のすぐ隣の朝鮮半島情勢が今後どの様に展開していくのか、そしてまたわが国はそれに対してどのように対応していくべきか、そういったことが大変大きな関心と呼んでいる。

昨今の北朝鮮を取り巻く核開発あるいは拉致などの問題については、わが国で議論が沸騰しているところである。特に北朝鮮の核開発、ミサイル開発への対応が国際社会の差し迫った課題であり、その動向をどう見るか、あるいはその意図が何であるかが議論のあるところだ。そこで、北朝鮮は最終的には核開発を目的としているのか、あるいは交渉のカードということで場合によってはあきらめてもいいと考えているのかが重要なポイントになろう。

A J 活 動 レ ポ ー ト

当然本パネルディスカッションでも、そうした問題点が議論されるどころだ。しかしそれに加えて、今求められているのは、長期的な視野にたち、「北東アジアの中での朝鮮半島」という観点から、わが国としてどの様に対応していくかを探求することである。そうした問題に焦点をあてて、このパネルディスカッションを展開していきたい。

パネリスト

小此木政夫

慶應義塾大学 教授

現在、朝鮮半島問題で焦眉の急を告げているのは言うまでもなく北朝鮮の核問題である。それを含めて、昨今、北朝鮮問題が極めてグローバル化されるに至った経緯を最初に指摘したい。

従来、朝鮮問題はそれほどグローバルな問題ではなかった。唯一の例外が50年前に終わった朝鮮戦争であるが、これはちょうど米ソ対立のターニングポイントにあったので世界的な関心事となった。この影響は、ある意味ではベルリン封鎖より大きく、これをきっかけにヨーロッパではNATOに軍事機構が誕生した。つまり、統一NATO軍が生まれたきっかけとなった事件が朝鮮戦争であったのである。

従って、朝鮮戦争は極めてグローバルな問題であったのだが、それを除くと、元来の朝鮮問題はそれほどグローバルな問題とはならなかった。ユーラシア大陸の東にある半島、人口は多いが世界的にはあまり注目を浴びない、かつてヨーロッパの宣教師たちは朝鮮王朝を、「隠者の国」と呼んでいたが、その言葉が示すとおり目立たない国として存在して来たわけである。

その後、日本の植民地支配を経て朝鮮の独立問題が浮上したのだが、大変不幸なことに、冷戦の勃興と共に朝鮮半島が東西対立の一つの焦点になってしまい、その結果朝鮮戦争にまで発展してしまう。しかしその後の50年間は「不安定の中の安定」という意味では比較的安定した状態が続いたと考えてもいいだろう。

しかし現在、北朝鮮の核問題を巡って半島の問題全体がグローバル化しつつある。なぜグローバル化しつつあるのか。その背景には大きく二つの要素があるが、一つは北朝鮮の大量破壊兵器の開発である。半島を越えて他国に影響を及ぼすという核やミサイル兵器そのものが持っている普遍的な性格によって北朝鮮問題がグローバル化を余儀なくされている。この問題は最近とはいっても、93-94年の危機から起こっている事態だが、94年のジュネーブ合意によって向こう10年間この問題は凍結され、グローバル化されない状態が続いてきた。

しかし、再びこの問題が大きくクローズアップされている。一つは北朝鮮がそれまで凍結されていたプルトニウムタイプの核とは別のウラン濃縮型の核開発に着手したことが発覚したからである。その意味で10年前の状態に戻ってしまったのだが、それだけではなくグローバル化する第2の契機となる事件も同時に進行したことに注目しなければならない。

その第2の契機は、一昨年9月の9.11テロ事件である。このテロによって新しい戦争の論理が朝鮮半島に適用されるようになったことが問題の焦点である。ブッシュ政権は「国際テロリズムとの戦い」を正面に掲げ、それを基にアフガニスタン、そしてイラクでの戦争を遂行したのだが、これは論理的には朝鮮半島にも適用される。つまり、「ならず者国家が大量破壊兵器を開発している。これを阻止しなければいけない。でなければ、これがテロリストの手に渡るではないか」という論理構成がイラク戦争の論理であった。だとすれば、イラクと北朝鮮は同じ範疇ではないかということになり、そうした観点から北朝鮮の問題が急速にグローバル化されたということである。

●
それでは、「グローバル化」は何を意味しているか。経済の分野をひもどくまでもなく「グローバル化」とは多分に「アメリカ化」を示す要素が強い。この点を第2に触れておきたい。これまでわれわれは朝鮮半島問題を研究してきたのだが、朝鮮半島の内部のこと、特に北朝鮮の体制や経済状態という体制の中の問題、あるいは南北関係、更には広げて周辺諸国との関係がどうかということを中心に議論してきたわけである。しかし、今後の朝鮮半島情勢の行方を最も大きく作用するのが何かといわれると、アメリカになりつつあると言わざるを得ない。

つまり、アメリカ政府の政策決定過程や大統領選挙を控えた政治情勢が朝鮮問題に大きく影響を持つようになったということである。もちろんアメリカ政府も一枚岩ではなく、イラク戦争の方式をそのまま北朝鮮に適用しようという強硬派もいるし、イラクと北朝鮮は違うという穏健派もいるだろう。しかしいずれにしても、アメリカ政府内の政策決定のプロセス、あるいは大統領選挙を控えた国内政治、世論の要素がどう動くかによって朝鮮半島の問題が左右されていくという意味で、従来と違う全く新しい情勢が出てきている。

従って、われわれが今後注目しなければならないことは、アメリカ政府の穏健派、強硬派と言われるグループの動きである。少し前まではこれらのグループの間でかなり激しい論争が繰り広げられたのだが、今では多国間協議という

方式がクローズアップされある種の妥協が生じている。

今年の4月下旬、北京でアメリカ、北朝鮮、中国の3者会談が開催されたが、この背景は様々な理由がある。例えば、強硬派とされる人物がラムズフェルドやウォルフォウィッツら国防省の文官指導者たち。そして多分チェイニー副大統領、強いてはブッシュ大統領もそうした人たちに共感を持っていると思われる。逆にパウエルやアーミテージなど国防省の指導者たちは北朝鮮との対話の実現に力をいれてきたわけだが、アメリカ政府は非常に早い段階で「北との直接交渉はしない」ということを政策として掲げているので、彼らは「北朝鮮との交渉をやりましょう」とは言えない。それを言ったら国防省強硬派からの非難をあびることは容易に想像がつくため、苦肉の策として多国間協議というかたちの方式がスタートしたのだろう。

多国間協議であれば、「これは米朝交渉ではないのだ」という言い方が可能になる。しかも多国間協議が失敗した場合は強硬派の意見が採用されやすい内容となっており、こうした2段構えの態勢が整えられつつある。多国間協議を掲げながら、アメリカは同盟国や朝鮮半島周辺諸国との連携を密にしているが、そうした中でどのように北朝鮮に対して対話を求めながら圧力を行使していくかが、米韓、あるいは日米の首脳会談の主要テーマとなったのである。

この多国間協議が唱えられてから数カ月間は小康状態を保っていたが、最近の情勢はこの小康状態が終わりに近づいていることを示している。従って、この状態が続く間に小さな均衡を制度化していくことが肝要であり、それが多国間協議であるという言い方もできるのではないか。

では日本との関係についてであるが、冷戦時代の日本の朝鮮半島政策は独自の裁量権がなく、何か特別なことをできるという幅が非常に限られていた。それは朝鮮半島の南北分裂、米ソあるいは米中の対立といった二極的な状況下で、日本が独自に北朝鮮との関係を改善することが実質的には不可能であり、また仮にそれを実行すれば韓国との関係が決裂する、或いはアメリカとの関係が大変厳しくなってしまうという問題がその背景にあったのである。

しかし問題は冷戦終結後である。国会議員による訪朝団からはじまり昨年の小泉首相の訪朝など、日本はアメリカや韓国との連携を図りながら独自色を若干示すような外交が展開された。

この様に順調な独自外交を繰り広げつつあるやに見えるのだが、現時点で日本外交を拘束している、「二つの悪夢」も無視し得ない。一つは、アメリカが日本の頭越しに突然北朝鮮と関係を改善していくという悪夢である。これは2000年10月

のオルブライト国務長官の平壤訪問を契機として、その年の秋から暮れにかけて実現しかなかったのだが、この時はクリントン大統領の訪朝さえ検討された。さらに二つ目の悪夢は米朝関係が非常に緊張して、アメリカが武力行使に出るシナリオである。実際、93～94年の危機時にアメリカは北朝鮮の核開発を阻止するために寧辺（ヨンピョン）の核施設に対する外科手術的な爆撃さえ検討したわけである。

いずれの悪夢も日本にとって好ましい選択肢ではない。この二つの悪夢はいずれもアメリカでは政権が変わるとこれほど政策が変わるのかという見本にもなるわけだが、その二つの悪夢の間でわれわれは行動しているのだということを念頭に置かなければならない。米朝関係の「悪化＝改善」という二つのシナリオの間で日本はちょうど時計の振り子のように往復してきた。この往復運動の中で、どの様にして自らの外交的なポジションを固めていくかが日本外交の要点となろう。

パネリスト 伊豆見 元

静岡県立大学 教授

朝鮮半島の将来を考える場合、北朝鮮の核問題は避けて通れず、この問題が何らかの決着を経ないままに朝鮮半島の将来は展望し得ない。そうなるとこの核問題がどの方向に向かうのかが焦点になるのだが、これについては相当近い時期に何らかのかたちが見えてくるであろうと思われる。

しかし朝鮮半島の将来を見通すと、金正日体制がどこかで大きく変質するか、あるいは終止符が打たれるかのいずれかが展望され、その中で北朝鮮が今後採り得る選択肢が大きく三つほど考えられる。

1番目は、われわれにとって非常に望ましいことだが、核兵器開発をプルトニウム、ウランニウム、すべてを全面的に放棄、廃棄して解体することを北朝鮮が受け入れることである。現実性は甚だ低かろうが、その可能性は全くないとは思えず北朝鮮にとっての一つの選択肢となることは間違いない。

2番目は、核兵器を保有はするが量を増やしていかない、輸出はしない。更に、小型化して核ミサイルにしないという最低限度の核保有であり、さらにそれを通じた「核抑制力」をもって外側から、とりわけアメリカからつぶされないようにするという選択肢である。これはいかんせん中途半端なものであるし、アメリカからの保障も確実なものではないが、抑止力をもって何とか自分たちとしては最低限生存を保つというシナリオである。

3番目は、体制保障のため積極的にアメリカとの取引を実現させる方法である。従来の北朝鮮の

A

J

活

動

レ

ポ

ー

ト

A J 活 動 レ ポ ー ト

対外政策を見ると、アメリカに対する核を用いての威嚇をどんどんエスカレートさせている。その威嚇のカードとして、まず核兵器開発を量産態勢におき、小型化を図って核ミサイルを保有し、さらに一番の禁断のカードであるが、これを輸出するといったことが挙げられる。

この三つは極めて脅しが利くカードであり、「これを避けるには、アメリカは北朝鮮との交渉に乗り出して、やめさせたいのであれば北朝鮮との間で取引をせよ」と言っているのである。その取引とは、すなわち北朝鮮の体制を積極的に保障しろということである。従って、これは抑止力で何とか生存を保つのではなくて、アメリカからの保障を引き出すという戦術である。

●
恐らくこの三つぐらいしか北朝鮮にとっての選択肢はないだろうが、これが今後どの方向に進むかは具体的には見えてこない。しかし、どの手段を試してみても恐らく金正日体制は相当揺さぶられ、変質、あるいは崩壊せざるを得ないであろうことは想像がつく。

まず、北朝鮮が一方的な譲歩をした場合にどうなるか。核兵器を完璧に放棄するにあたって国際社会が要求していることは、「目に見えるかたちで検証が可能で、なおかつ二度と後戻りしないかたちで核兵器を放棄させる」ことであり、実際問題それを実行しようとするとは相当厳しい手段になることは間違いない。

例えば、放棄する過程を監視する査察任務一つとっても、査察官が最低でも数百人のオーダーが必要であり、時間も場所もすべてこちらが選んで、数百人が見たい所はすべて見るというシステムで行わなければならない。そんなことを現在の北朝鮮の体制が許せるかどうか、あるいは、それによって今のような非常に固く閉鎖的な金正日独裁体制を保っておくことがものすごく難しくなるかもしれない、という問題が第一点。

更に、北朝鮮が大量破壊兵器を放棄し、より国際社会の責任ある一員としての方向に進めば国際社会が北朝鮮を支援していく割合は増えていくが、これは別の言葉で言えば、外からヒト・モノ・カネが入るということである。これもまた同じことで、今の金正日独裁体制を中から相当揺り突き動かす、崩壊に導くようなモーションになるであろう。

2番目の最低限の核抑止力を持つというシナリオについても国際社会の反応が問題とされる。国際社会として恐らくこのシナリオ自体を認めるわけではないが、これを前提に軍事行動に出ることはあまり考えられない。しかし、その状況を受け入れて核保有の北朝鮮と共存するという選択肢が国際社会にはないので、結局は今現実に行われていることだが北朝鮮をどんどん締

め上げていくことになる。現在、非合法的なかたちで北朝鮮に流入する外貨を、国際社会が非常に力を入れて遮断しようとしているが、それに加えて合法的なかたちで北朝鮮に流れている交流、貿易も締めつけていくことになる、つまり兵糧責め、経済制裁によって砕いてしまう。

しかも、核保有を最低限であれ明確にすることによって完璧に国際社会から孤立することは間違いなく、恐らく中国、ロシアをも敵に回すことになる。従って最低限の抑止力は持つかもしれないが、外からほとんど物が入ってこなくなる。

物が入ってこなくても、そんな簡単に体制がつぶれるかと問われれば、つぶれないと見るべきであろう。しかし、真綿どころか荒縄で首を締め上げていくような徹底的な封鎖をすると、体制を支えている党幹部、軍といったエリート階層に特権を付与することが難しくなる。その結果として内側から体制が崩れてくる可能性は無視し得ない。

●
それでは3番目の核の脅しのエスカレーションを選択した場合であるが、これはどこかでアメリカの堪忍袋の緒がキレてしまうかもしれない。とりわけ9.11以降のアメリカの変容にも深く関わるのだが、テロリストの手に核兵器がわたるといふ最悪のシナリオへの恐怖から、北朝鮮に対して軍事的手段を行使する可能性は極めて高い。

アメリカが「怖い」と思う場合、周りの国が「大丈夫だよ」と言ってもほとんど意味がない。従ってアメリカが怖いと言っている以上、韓国でも日本でも止めることは非常に難しい。この場合の最悪のシナリオは戦争であるが、戦争によって金正日体制が生き残る可能性はゼロである。

●
以上の如く考えると、北朝鮮が採り得る三つの選択肢のどれを採っても金正日体制は最悪のシナリオなら急激に崩壊するし、そうでなくても長期に渡る体制存続は難しい。それを踏まえて朝鮮半島の将来を考えると、いずれも金正日体制が朝鮮半島から消えた後、どの方向に進んでいくか、またその中で日本の対応も注意深く探っていかなければならない。

パネリスト
金 忠植

東亜日報 東京支社長

現在、北朝鮮問題を巡って朝鮮半島は危機的状態にあるが、これはある意味では将来展望をひらく上での機会にもなるのではないかという観点を持っている。もともと「危機」という言葉自体が、「危険性」と「オポチュニティー（機会）」という両方の意味を持っている言葉であり、

逆に休戦と和平が近付けば近付くほど、砲弾がさらに激しく飛び交うのも現実である。そうした意味で、この危機的状況を首尾良く回避し、次の岐路で賢い判断と知恵を充分に発揮しさえすれば北朝鮮を普通の国にソフトランディングさせる、ひいては朝鮮半島、北東アジアの平和ももたらす機会になるのではないかという期待を持っている。

その根拠は以下の2点に集約される。まず、アメリカ、韓国、日本、中国、ロシアといった全ての関係国が北朝鮮の核保有に反対するというコンセンサスに注目しなければならない。このような北朝鮮を巡る5カ国の本音、建前まで

一致している利害関係こそ、ある意味で解決を示唆している部分ではないだろうか。

第二は、北朝鮮の核とミサイルへの執着は本質的に生き残りの手段であり、それ自体が目標ではないということである。核とミサイルを最優先課題と考えるのは、体制保障と経済回復の方法を構築するための手段だと思われる。従って、この二つの事実を前提にすれば、ある時期には危機回避の日が来るのではないかというのがジャーナリストとしての感想である。

紙面の都合上、パネルディスカッションは第1プレゼンテーションのみを掲載した。続く第2プレゼンテーション、ディスカッションの全容は当センター「2003年度活動報告書（2004年3月発行予定）」に所収

運営委員会

2003年9月8日、当面のセンター運営方針の確認等のため運営委員会を開催した。冒頭、当委員会の委員長に就任の三浦センター長よりのあいさつ、委員の紹介が行われた。冒頭、三浦センター長より、本学における諸活動、アジ

■センター代表■

西原 春夫 学校法人国土館 理事長

■運営委員■

青木 保 政策研究大学院大学 政策研究科教授
太田 博 元タイ大使 三菱重工業株式会社社長室 顧問
三好 正也 株式会社J-Wave 代表取締役会長兼社長

ア・日本研究センター活動報告がなされ、さらに三浦副センター長より当日の出席者の紹介、平成15年度活動方針、下半期計画案について提議された。

三浦 信行 本学学長、当センター長
三浦 宏一 当副センター長、本学 21世紀アジア学部 教授
岡田 保良 本学 国際交流センター長、イラク古代文化研究所 教授
高橋 彰 本学 政経学部 教授
梶原 景昭 当センター研究員、本学 21世紀アジア学部 学部長
荒木美智雄 当センター研究員、本学 21世紀アジア学部 教授
小牧 輝夫 当センター研究員、本学 21世紀アジア学部 教授

I 北東アジア5大学構想の推進

中国人民大学に創設された孔子研究院の張立文院長ほか3名が10月5日～16日に来日予定。この来日目的のひとつに人民大学が一大プロジェクトを結成して編纂する「儒蔵」（「儒学」に係る中国国内の文学、歴史、哲学の研究者を集め、数年間かけて作成）を広く日本政府をはじめ社会に知らしめることが挙げられる。一行は来日日期間中、数々の国際会議、講演活動、懇談会等のスケジュールが予定されているが、その中で10月10日に本学が主催するシンポジウムに出演する予定で、文部科学省ならびに社団法人青少年育成国民会議共催もいただいている。

北東アジア5大学構想は、現在、吉林大学、極東国立工科大学、モンゴル国立大学に賛同をいただいている。11月1日に第1回の「5大学代表者会議」を吉林大学において開催すべく進行中である。また現在のところ、韓国の高麗大学はオブザーバーとしての参加を希望しており、まずは「5大学連合」として始めた。この5大学構想は、単にクラシックな学術的交流だけにとどまらず、北東アジアが抱える諸問題に加えて地域の外的問題にも積極的に取組み、世界中で起きている紛争等の緊張緩和に向けた役割が課せられている。

将来的には、大学関係者との交流だけにとどまらず、

民間の団体、国内の北東アジア問題にかかる著名な文化人との交流も深め、意見交換し、北東アジア構想を盛り立てていくことが必要とされる。

II 北東アジアにおける文化交流について

北東アジア地域を考える際、ミクロ的観点からの研究だけでなくマクロ的観点から地域文化を研究し、北東アジアが世界の中でやるべき役割を見極め、それぞれの国・大学が共通意識をもって取り組むことが必要である。

現在の日本の大衆文化（映画・ゲームなど）がアジア地域のみならず世界へと浸透し、こうした文化を産業として考えても既存産業に比して群を抜くものとなっており、“日本式現象”と呼ばれるべきことが起こっている。このような視点から北東アジアをみつめなおすと、“東アジア新文化圏”のような文化的共有の構築が、相互交流の基盤となる。

北東アジア諸国間の相互理解を確立するには、政治・経済の交流より文化を主体とした交流こそが一番の早道である。特に日本文化は他のアジア諸国に比べ、群を抜き文化遺産も豊富にある。特に文化交流がもっとも盛んなのが現代大衆文化であり、大衆文化の主役たる若い世代の参加が、これからの交流に書かせない要素となろう。

アジア関連資料情報

◆ 文部科学省等 『平成14年度 製造基盤白書概要 —日本製造業の復権に向けた戦略的取組—』 2003.6

文部科学省、経済産業省、厚生労働省が発表する本白書は「ものづくり白書」と呼ばれ、2001年に第1回が発表された。3回目となる今回の白書では、アジア勢の伸張に焦点を当て、猛烈な成長をみせるアジア諸国を脅威としながらも、日本とアジア勢がすみ分けして発展していくという好循環の実現が必要だとし、そのためのシステム作りについて提言した。

白書ではまず、日本の製造業の生産が93年以来の低水準であることを指摘。特に設備投資を抑制する動きが90年代を通じて恒常化した結果、設備の老朽化が進んでおり、それに対するかのようなアジア経済発展への脅威が増していることが印象づけられている。

しかし、アジア諸国は日本の製造業に対してビジネスチャンスを提供している一面もあり、その意味では日本製造業との分業的・相互補完的関係を構築しつつあるともいえる。具体的には、アジアにおける日本の生産拠点では生産コストの優位性を取り込み、日本国内の生産拠点では技術開発などを通して競争力の維持・強化を行い、日本とアジア勢のすみ分けによる好循環を実現することが指摘された。

一方、日本の中小企業の生産水準は近年低調気味

ではあるが、厳しい経済環境下のなかでも高シェアを獲得している特定分野の「ニッチトップ企業」があると指摘。また、伝統工芸品産業に関しては、生活様式の変化や景気低迷による需要減に加えて、輸入品を中心とする模造品の被害などにより生産額が90年代を通じてほぼ半減するなど打撃を蒙っている。この振興のためには、デザインやブランド戦略、インターネットの利活用、海外での販促など新たな需要喚起が必要だとしている。

日本の製造業全体の国際競争力強化のためには、基本的には官民の研究開発の拡大・重点化が必要だとし、さらにITの戦略的活用により、「新たな価値の創造」と「業務プロセスの革新」を求め、IT活用の取組を企業活動のあらゆる局面で戦略的に利用すべきと指摘した。

次世代のものづくりを担う労働者の育成に関しては、生産ラインの海外直接投資により現業部門の縮小による労働者の絶対数の減少、現場労働者の技能の低下が懸念される。従って、今後ものづくりの担い手として若年層の確保が必要と指摘し、教育面で、国民の関心を喚起することの必要性と、地域住民の学習機会を多く提供すべきことを提言している。

◆ 経済産業省 『経済産業技術協力研究会 アジア・ダイナミズムと技術協力政策の展望』 2003.7

中国の経済発展に加えて東アジア諸国間の経済連携が進みつつあり、同地域の経済環境が大きく変化しつつある。その中で、アジアにおける経済産業技術協力のあり方についても大きな転換期にあり、これまでの一方通行の支援ではなく、東アジアの安定的成長を支援すると共に日本にも還元が期待できるような各国相互の利益となる経済制度やシステムの整備を強調した報告が、経済産業省貿易経済協力局審議官の私的研究会である経済産業技術協力研究会によって発表された。

本報告では技術協力政策に関して、重点課題として、①知的財産権保護、②基準認証の共通化、③物流の効率化、④環境と省エネ、⑤産業人材とインフラ整備の5つの分野を特定し、それぞれについて行動目標を設定している。

それぞれの行動目標として、知的財産権保護では日本企業が中国で模倣品対策に必要とするコストを向こう5年間で半減し、知的財産権の充実化を通じて海外からの直接投資の拡大をはかるものとしている。さらに、地域の一体感形成に欠かせ

ない基準認証の共通化では、自動車などの産業ニーズに即した共通化に向けた協力体制の確立、具体的に電気安全分野の基準認証に関して相互承認を可能とすることなどが挙げられている。

一方、物流効率化では通関を含めた域内の物流の迅速化を図るため、主要生産拠点から目的地までの所要時間を5年間で3分の2にする目標を設定した。また環境・省エネ分野では、当問題では一歩先を行く日本の技術の普及活動を促進すること、具体的には「日本式環境・省エネ制度やシステム（公害防止管理者制度など）を5年間で5件展開する」としている。最後の産業人材の育成とインフラ整備については、途上国自身が自立的な取組に移行することを日本が支援していき、具体的には5年間で5000人程度の研修指導者を育成するとしている。

さらにこれらの施策を展開するために、人材育成に置ける企業OB活用制度の創設や、若年層の参加機会の拡大などが課題として挙げられた。

